
SMクエスト

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SMクエスト

【Nコード】

N1414C

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

文芸部員の千尋は大阪の頼みにより、SMをテーマにしたRPGのプロットを作ることとなる。カオス&おバカな日常を送りつつ、千尋はプロット完成を目指すのだが……。原作はランデブーさん。めざせちよいエロだったけどエロからどんどん遠ざかるよ。

プロローグ

彼女の武器は鞭と低温蠟燭、ピンヒール。それになにより、サデイズティックなその性格。人は彼女のことをこう呼ぶ、「勇者様」と。

勇者は今、モンスターに囲まれていた。

モンスターはビルドアップという名前で、人間の雄に酷似していた。丁度、全裸に木彫りの仮面をつけているようなビルドアップの筋肉は、極限まで鍛え上げられ、盛り上がり、ピクピクと痙攣していた。正に異形のものと言って差し支えないほどの肉体は汗ばんでいて、吐息も荒い。表情は分からないが、興奮しているようだ。

勇者は彼らをねめつける。一方、モンスターも、勇者を舐めるように見つめている。

モンスターの瞳に映る勇者の姿は、妖艶という言葉を具現化したよう。豊満な乳房と滑らかなくびれ、肉感のある臀部、それらをきつく締め付けるように包むタイトなレザースーツ。どこからどうみても扇情的な人間の雌である。モンスターどもの吐息が生臭く、熱いのも無理はない。

互いの視線を絡み合わせる、勇者とモンスターの群れ。まさに一触即発。

勇者は自身の武器である鞭を固く握り締め、ひとつ息を吐いた。そして刹那の間もおかず、鞭を左右に振るった！

瞬く間に、モンスターの肉体に鞭が噛み付き、跳躍する。強固な

モンスターどもがバランスを崩し、陣営が壊れる。

その隙について、彼女は前進、更なる追撃。

雄叫びが弾け、モンスターどもが次々と大地に平伏してゆく。砂塵が舞い、大地に振動が重なる。

勇者は気合を溜めると、最大級の一発を放った。

「跪け、ウスノロのクズどもが！」

烈風が四散し、ついにモンスターの最後の一匹が吹き飛ばされた。尾を引く叫びを上げながら落下、砂が空を仰ぐ。彼女は平然とそれを見つめ、慣れた手つきで鞭を腰に巻いた。

「ふん、私にたてつこうなんて、百年早いわ。卵子からやり直しな！」

鬼畜気味にそう吐き出して、彼女は踵を返した。と、歩みだそうとしたピンヒールを止める何かがあった。

「くっ、待て……」

息の残っていたらしい。モンスターの何匹かの腕が、彼女の美しい足を掴んでいた。

「なんだい？」

「頼む……」

モンスターの粘っこい眼が勇者を捕らえる、そして、

「もっと打ってくれ！」

四つんばいになった。

作ってますよプロット

「こんなモンスターいるかつ!!」

千尋は絶叫しながらパソコンを投げた。そして自分でキャッチした。

ぜいはあと肩で息をしながら椅子に腰をおろし、デスクにパソコンを直す。そうして渋々と画面を見つめた。

デスクトップに文字が羅列している。それは所謂、プロットというものだった。

「女王様が勇者って、どんな世界観だよ。いくらエロゲーでも許されることと許されないことがあるんじゃないの? うゝゝ」

唸りながら、千尋はバックスペースキーを押した。流されるように、打ちこんだ文字列が消えていく。

女王様、モンスター、鞭……。

三時間以上かけて作った文書だったが、苛立つ彼女にそれを慈しむ余裕はなかった。文書を真っ白にしてから、デスク脇に置いたマグカップを手取る。

千尋はゲームのストーリープランをたてている。とはいっても、手がけているのは同人ゲーム。市場に出回ることはない。本業は学生だ。

「何が悲しくて二十歳のうら若き乙女がSMエロゲーを作らなきゃならないんだよう」

デスクの前に淹れたアールグレイティーは、すっかり冷え切っていた。

「しかも苦っ……」
ちびちびとアールグレイティーを口に含む。そういえばお腹もすいている。グウ。

「おう、進んでるかあ、千尋！」

突然背後から呼ばれて、千尋は思わずマグカップを投げた。そして自分でキャッチした。が、中身は服にかかった。

「何やってるか」

「大阪先輩が急に話しかけるからですよ」

抗議しながらも立ち上がる。そして、さてさてどうしたものかと、千尋は溜息をついた。

千尋のいる部屋、文芸部室にはありとあらゆるものが散乱している。

部屋の中央には六台の机が対になって並んでいるはずなのに、机というより山と化しているのは何故か。

しかも文芸部の部室であるはずなのに本が少なく、ジュースの空き缶やペットボトル、開封済みのお菓子、化粧道具、ぬいぐるみ、衣服、もろもろ、部員たちの私物が占拠している。

更に困ったことに、部員は部員でも、現役だけではなく、歴代の部員のものであるのだ。

当然、紅茶をふき取るものがどこにあるのかなど、見当もつかない。

千尋はぐったりとした表情で腕をまくると、太古の地層に腕を突っ込み始めた。

「おい、掃除してないでゲーム作ってくれよ、ゲーム」

「分かってますよ。それより早く拭かないと、シミになっちゃう」

「シミよりゲームだろ。コミケまで時間がないんだからさあ」

「分かってますよっ」

作業を中断して、千尋は振り返った。千尋の視界が途端に翳る。

「おい、あんまり怒るともつとチビになるぞ」

「大阪先輩がでかいんですっ」

千尋は爪先立ちに首を真上に向けながら彼、大阪を仰いだ。

千尋は小柄で、女性としても小さいほうである。対する大阪、彼は大柄で、男性としても大きい方だった。比較するならばアヒルと柳場敏郎、皇帝ペンギンと月の輪熊といったところか。

親指姫と猟師でもおかしくはない彼らは対面し、お互いに舌を出し合った。それから千尋はくると身を翻し、再び久遠の地層に頭から突っ込む。

「つていうか、なんで私にゲームのストーリー構成を任せてるんです？ 私、ゲームはFF9までしかクリア出来てないんですよ」
「いやだってお前、文芸部で唯一プロットたてるホビットじゃん。それに他のやつらはエロゲーって話もちかけただけで逃げたし」

「つていうか、なんでSMなんですか？ 貧乳ロリメイドとかツンデレ猫耳兵器とか、もっとマシな設定あったでしょうっ」

「だってさ、つままないじゃん普通のことやってもさ。SM女王が勇者のテキストエロゲーなんて聞いたことないだろ」

「でもモンスターも魔王もエム属性で奴隷願望持ってるなんて、どう盛り上げろっというんですか！」

千尋は発掘したティッシュペーパーを投げた。そして自分でキャッチした。

はたくように、紅茶のシミを拭う。濃い目のアールグレイティーは白いロングTシャツに大打撃を与えていた。諦めるしかなさそう

だ。

「……そんな設定じゃあ、勇者が勇者の意味さえ、ないじゃないですかあ」

ティツシュペーパーを強く握り締める。なんだか、全てが理不尽に思えていた。

「千尋、お前スランプか」

いつの間にか、大阪が腰をかがめて千尋の顔を覗いていた。腰をかがめても尚、千尋を凌駕する背をもつ彼の目は、不憫な捨て猫を哀れむような色をしている。

「知りませんよ、そんなこと」

素っ気無く背を向ける千尋。請け負ってしまった以上、途中で投げ出すのはプライドが許さなかった。泣きついてなんかたまるものか。

「そうか、それなら早く言ってくれよ!」

突然、千尋は重力を失った。持ち上げられた、と気付いたときには既に担がれていた。

「ちよ、何するんですかいきなり!」

非力な抵抗。大阪は五回転ジャンプをして千尋を黙らせると、

「まあまあ、俺にまかせろよコロボツクル」

飄々と言ったのけ、部室のドアを蹴り上げた。

主人公、三話目にして売られるかもしれない。

千尋が大阪に連れられてたどり着いたのは、繁華街のある裏通りだった。

昼間だというのに薄暗いのは、ビルとビルの間に挟まれているためなのか、こじんまりとした作りのためなのか。粘着質な闇の中、古臭いアパートのように店の扉だけ並んでいる。看板も何もない。千尋は息を呑んだ。

「いいところだろう」

大阪の頭にはネジを差し込むところさえないのだろうか、と千尋は思う。

「まあ、そんなに怯えるな。夜になればもうちょつとは明るくなるんだけどな」

大阪はぐいっと千尋の手を引張って進む。慣れた道なのか迷いがない。それがいつそう彼の歪んだ感性、その不気味さを演出している。

大阪は三回生、千尋は一回生であり、よくよく考えたら千尋は、大阪のことをあまり知らない。後輩たちに食事を奢り、時折ドライブに連れてってくれ、相談事があれば親身になって聞く。

そういう大阪しか千尋は知らないが、もしかしたらそれは表の顔だったのかもしれない。本当の大阪は、面倒見の良い先輩という仮面を被った悪魔かもしれないのだ。

千尋は思う。

そうだ。大阪先輩はSMエロゲーのプロットをか弱い未成年の可憐なロリ系美少女（千尋の自称）に任せた。思えばそれが片鱗だったのだ。

千尋は更に思う。

このままでは悪魔に売られ、変態親父の慰めものになり、逃げられないように薬物を打たれ、両手足に手錠をつけられてなお慰めものにされ、肉体も精神もサバンの砂となって、千の風になって、使い物にならなくなったらドラム缶に詰められ、コンクリートを流し込まれ、黒服の男たちによって東京湾に落とされ、最近ようやく水質が回復して戻ってきたお魚さん達の新しいスウィートマイホームになってしまいうに違いない。

想像し、千尋は青ざめた。逃げるのなら今しかない。千尋は足の力を抜くとバタバタと抵抗した。

「あつ、こら、なんだよいきなり！」

大阪は千尋を掴んだ手を強めた。千尋の抵抗が激しくなる。

傍目からみてまるでそれは、玩具の購入をせがむ子供と、その子供を必死に宥めようとする父親そのものであった。だから、このような声を彼女にかけられたのは当然のことだった。

「あら大阪クンじゃないの。大学生のくせに子供がいたのね」

千尋は驚き、声をかけてくれた細長い影を凝視した。

人がいた！ しかも女の人！

「助けてください、コロサレルウ！ 売り物にサレルウ！」

「おい千尋、お前人聞きが悪いぞ」

「あらあらそれは大変ね。大阪クン駄目よ。女の子泣かせちゃ」
「ランデブーさん、こいつは女の子じゃなくてコロボックルですよ」

ランデブーさん？

千尋はやけに間延びする声帯の持ち主に疑問符を浮かべた。しか

も大阪はあまりにも親しげな気がする。まさか仲間ではないだろうか……。

千尋は怯えながら、俯いていた顔をあげた。

「可哀想。怖かったでしょう」

小さな風鈴のような透明な声。花も嫉妬する可憐な美しさ。千尋に声をかけた人物は、度肝を抜かれるほど端麗な女性であった。

つきたての餅のような白い肌に、コバルトブルーのコートを纏う。絹のような黒髪が胸元でさらりと音をたてる。女神のような穏やかな笑顔が輝きを放っている。

薄暗い路地裏で、彼女は神々しくオーラを放っていた。

「うおっ、眩しい！」

千尋は両腕で目をガードした。

「あら、ごめんなさい。少し美しすぎたわね、私」

どうやったのか、女性はほんの少しだけ自身の光源を下ろすと、千尋に手を差し伸べた。千尋は訝しく思う。綺麗に輝いていたとしても、大阪と同じく千尋を売ろうとしているかもしれない。目映いほどのオーラの向こうにキシャーとかキャシャーンとか奇声を発するメデューサが（長くなりそうなので切る）。

「大丈夫よ。あなたを売って、変態親父の慰めものにして、逃げられないように薬物を打って、両手足に手錠をつけてなお慰めものにして、肉体も精神もサバンナの砂として大空を吹き渡ってみて、使い物にならなくなったらドラム缶に詰めて、いいえその前に臓器を抜いてモグリ医師に売りさばいたりドイツのアングラ肉屋に死肉を売りさばいてウィンナーにしてもらったり残った皮膚を剥製にしてマッドコレクターに贈呈したり名前や戸籍は不法侵入無国籍外国人に高値で売りさばいたり生きていた痕跡まで吸い取ったりはしないわよ？」

ヒッと、千尋は息を呑み込んだ。

「ランデブーさん、千尋の気持ちを勝手に読まないで下さいよ。しかも疑問系で。千尋も、そんな失礼なことを思ってたのか？」

呆れるように腕を組む大阪。千尋は警戒しながらも立ち上がり、衣服についた埃を払う。そして大阪を埴輪に酷似した空虚な眼球で仰視する。

千尋の無言の抗議に大阪はポリポリと頭を搔くと、

「どう書けばいいか分かんなくてスランプなんだろう？ だから、知り合いの女王様を紹介しようと思ってさ。丁度良かったな、この人」女性に手のひらを伸ばした。

「紹介するよ。ランデブー女王様だ」

ランデブー“女王様”！

千尋は咄然としながら大阪の言葉を右から左へ

「受け流さないでくれる？」

「は、は……い、」

極限まで萎縮しながら返事を搾った。

「んー、大阪クン。また新しい女王様のゲームを作る気なのねえ。

女王様アクションゲーム、女王様恋愛シュミレーションゲーム、女王様シューティングゲーム、今度はなんのゲームかしらあ？」

「女王様と永遠と絆の君と響きあい生まれ変わり伝説を呼び覚まし魂を呼び起こし生きる意味を知るRPGです」

「長いな！」

思わず千尋は突っ込んだ。

「あら、もうちょっと長くてもいいんじゃない？」
怖くて千尋は突っ込めない。

「まあいいわあ。取材でしょう？　いいわよお。よろしくね、えーと……千尋ちゃん？」

「はい」

「ふふふ、可愛いわね」

ランデブー女王様は薔薇の如く芳しいオーラを八方に放つと踵を返した。

「こっちが店なの。ついてらっしゃい」

そして女王様は、パリコレモデルよろしく颯爽と歩き出すと横から薙ぐように走ってきたシロウサ宅急便の3メートルに撥ねられたのだった。

女王様と約束

シロウサ宅急便のトラックが激しいブレーキ音を立てながら電柱にぶつかる。全身を叩くような爆音を出しつつトラックは横転し、やがて停止した。

「だ、大丈夫ですか……」

横転したトラックの窓から何者かが這い出てきた。運転をしていた配達員だ。まだまだ社会に出たばかりといったフレッシュな顔立ちの配達員は、よろよろと腰をあげ、現状を見やった。倒れた女性、倒れたトラック、倒れそうな電柱、倒れそうな自分。

マツチヨな白い兎がダンボールを片手で運んでいるシロウサマークが背中についた真っ白い作業服を着ていた配達員であったが、みるみるうちに服より顔面漂白されてゆく。ついでに頭からちよっと血も垂れてる。

当然である、人を轢いたのだ。

一方、目の前で突然起こった出来事にしばしポカンと口をあけて埴輪のように直立していた千尋と大阪は、シロウサ宅急便が物悲しげにこちらに視線をよこしたのを合図に、ハッと我に戻った。

「じよ、女王様！」

三人が駆け寄ると、女王様は日向のように温かな微笑をたたえながら、少々の血反吐を吐いた。全身をアスファルトにゆだねながら、どこか優雅な彼女の手足は、ちよっと変な方向に曲がっている。

「あら、皆さん。どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないです、轢かれましたよ！ 僕が轢きました！」

「あらあ、また？」

シロウサ配達員が蒼白になりながら絶叫すると、女王様はやれやれといった風に首を傾げた。まるで呆れたような動作に、千尋は目を丸くする。

「またって、大丈夫ですか？」

「大丈夫ではないんだけど、まあ、大丈夫でしょう。うふふふ」

笑っている。美しいが、不気味だ。

「……大阪先輩。女王様、頭でも打ったみたいです」

「や、大丈夫だろ」

「「大丈夫なの!？」」

千尋とシロウサ配達員が同時に突っ込むと、大阪はチツチツと舌を鳴らしつつ人差し指を振った。

そんなひどく古臭いアクションを絡めつつ、

「ランデブー女王様はB型で、おっちょこちょいなんだ。それでよく轢かれるんだ。三日にいったんくらい。だから頭蓋骨が丈夫であらせられるんだよ」

「ええ。私、頭蓋骨が丈夫なのよ」

どこから突っ込んで良いのか分からず、千尋は「頭蓋骨が……」と呟いた。非現実な現実に対処しきれず、すべてを受け入れようとして、いやいやと頭を振る。

「でも、体がおかしな方向に曲がってますよ!」

千尋が指摘したとおり、女王様の手足はグロテスクな状態になっていた。モザイクがかかってもおかしくないヘビーな形をしている。

「あら本当だわ。これは病院に入院したほうが良いかもしれないわね」

今まさに気づいたという様子で、女王様は口元の血のりを手で拭いながら……、

「立ち上がるんかい！」

「念のために病院へお送りしましょう」

千尋の驚きを華麗にスルーしつつ、大阪は女王様の傍に寄ると手を伸ばし、さっと抱きかかえた。

「あの、救急車は……？」

怯えた様子で配達員が尋ねる。頭からの出血量が増えているが、あまりのことに気づいていないようだ。

女王様はそんな配達員の胸元を撫でると、

「私、この界限で女王様してるの。ランデブーで聞きまわれればすぐに分かると思うわ。病院から帰ったら、お話ししよう？」

そつと内ポケットから財布を引き出し、ウイנקを投げやった。

配達員は女王様の美貌に一瞬で頬を染めると、小さく頷く。血が滴った。

言葉を介さない不思議な密約に「なんだこいつら」と千尋は心で思おうとして、払った。心を読まれたら何か怖い。

「千尋ちゃんって、言ってたわね」

「ヒィ！」

めくるめく恐怖心まで伝わったかと千尋は戦慄した。しかし、女王様はそんな千尋にニッコリと女神のように微笑むと、

「後はよろしくね」

「へ？」

「取材は出来なかったけど、ちゃんとつくって、一番にゲームやらせてね。私を満足させるのよ」

「えええ！」

千尋は飛び上がった。そして全身全霊でお願い事に抗った。

「困ります、困ります！　っていうか、ええ！」

顔を青くし、脂汗をかき、両手を振り回す千尋。しかし女王様は平然と、まるで千尋の反応などそよ風とひとしいといった風に、微笑む。

「やあね。千尋ちゃんの取材を受けようとして、トラックに轢かれたんだから、千尋ちゃんのせいなのよ？」　痛い思いさせた分、楽しい思いもさせなきゃ、人道に外れるわ」

「そんな無茶苦茶な！」

「あら、千尋ちゃんったら、ランデブーのお願いなのに、聞いて下さらないの？」

女王様は甘いお菓子のようなフェイスを残念そうにすると、潤んだ瞳を千尋に注ぐ。ウルウルと可愛らしく、純情そのもののような女王様。

その瞳孔がカッと爬虫類よろしく細く開いたのを、千尋は見逃さなかった。

殺される。

「や、やります……」

「嬉しいわ、有難う」

きゅるりと瞳孔が丸く愛らしくなる、女王様。千尋はそれを目に収めつつ、自身が人間として食物連鎖の頂点にいたいと思っていたが、それは間違いだったと痛感する。

「じゃあ、後はよろしくね」

女王様は朗らかに手を振り、大阪にお姫様抱っこされながら凄惨な事故現場を背にする。千尋はそれを見送りながら、女王様の姿が

完全に見えなくなったところで脱力した。
その後、配達員は倒れた。

スランプ解決法!?

千尋は一人、書類の墓場と化した文芸部室の隅で頭を抱えていた。昨日起こった出来事がありにも残酷で、非現実で、無茶苦茶で、魑魅魍魎的だったからである。

「どうしょ……どうしょ……」

スランプにデストロイな追い討ちをかけられ切羽詰まった千尋の顔色は、エグい色をしたアメリカ産ケーキのように青い。無理もない、女王様が入院なされたのだから。

……千尋に恐ろしげな約束を残して。

「もし期日通りにいかなかったら、こっ殺されルウ!」

あの女王様のことである。人の心を読むだけでなく更に非人道的なストーリーを絡める創造力無限大な女王様のことである。どのようなやられ方をするか、千尋の愚鈍な脳では計り知れない。

一般人に殺人という言葉を投稿やれば死体が思い付くだろう。刃物ないし鈍器、吐血ないし下血をした顕然たる死体である。

しかしながら女王様の想像するイメージに死体があってくれるだろうか?

保証は無い、ぶっちゃけ無い。

「はあああああゝ」

己の過酷な運命に千尋は一人、嘆息した。その時である。

「ふふっふふふ……」

どこからともなく、含むような男の笑い声が響いてきた。

[illegible]

ん……、おののいている？

突如として書類の山から現れたのは大阪であつた。

大阪は書類の山を掻き分けながら埃を撒き散らしながら、あまりのことで壁に後頭部を打ち付けた千尋に近寄ると、屁をこいた。

「謝るところ間違ってる……！」

「何をしてるんですか、先輩」

「俺いま、こうしてたわけ。そしたら、書類が意外と暖かいわけ」
大阪の体がじょじょにデスクの上を滑り、書類の山へと沈んでゆく。

込んでくれる。そして俺は……甘えすぎてしまったんだ……」

「昔の女と別れた理由みたいに言わないで下さい」

改めて現状を見直し、ただの馬鹿だったのだと悟った千尋は冷徹に言い放つ。大阪はめげずに千尋の寝首を狩りに行った。

「ぐえっ」

首根っこを捕まれて呻く千尋に、

「あいつに包まれてお前の足りなさが解ったよ、暖かさだ」

「は？」

「お前には情熱が足りない」

「はぁ……」

嫌な予感。

「ライバルだぁ！ お前にはライバルがないんだぁ！」

「ええ！？」

高貴な鷹のように手を広げると大阪は拳を握った。

「千尋わかるか、熱くなるにはライバルが必要だ。例えば初期ドラゴンボールというピッコロ、中期ドラゴンボールというベジータ、後期ドラゴンボールというセル」

「魔神ブウは？」

「誰それ食えんの？」

映画版ドラゴンボールというブロリー……」

「さては先輩、三十九巻あたりまでしか読んでませんね？」

「皆まで言うな！」

大阪はバツと手を横に振ると、

「いいか、世の熱い奴等にはライバルがいる。主人公と同格か、それ以上の魅力あるライバルだ。しかしお前はライバルがない。世

の平均的な大学生がそうであるようにライバルを持つちえないッだ！」

噛み噛みの大阪を見上げつつ千尋は、いささかへビーな表情を呈した。

「解りました、私に足りないのはライバルですね。解りましたよう。……でも、ライバルなんて何処にいるんですか。いったいこの地方大学のどちらにいらっしゃるんでしょうかねー？」

しまいには鼻で笑っていた。

大阪はムウと眉をひそめると、

「理想像は解ってるんだコロボツクル千尋。まずお前のように小さく、しかし性格や立ち位置は真逆であってほしい。つまり美少女だ」さりげなく失礼なことを言いつつ、続ける。

「美少女ならば萌えが必要だろう。昨今にわたり使い古され刷りきれた感のある“萌え”だが、やはり物語を展開し、あわよくばアクセスを増やすには萌えが必要となる。つまり……」

大阪はそこで唇を閉じ、千尋をじっと見つめた。

大阪の眉間には薄く血管が浮き、汗が吹き出ている。緊張が部屋を満たす。やがては聞こえるはずのない銅鑼の音まで響き始めた。

「つまり、つまり……」

緊張が緊張を呼び、銅鑼の音が最高潮へと達した瞬間――！

「「「転校生よー！！！」」」

外から女学生の甲高い叫び声が聞こえた。

あまりのことに大阪と千尋は暫しフリーズし、互いに目を合わせた。

「大学なのに」

「“転校生”???」

大慌てで二人は声がした方へと走り出した。部室の窓から上半身だけ乗り出す。

文芸部室はあらゆる部やサークルの部屋がひしめき合う建物、部室棟の二階にある。そこからは、大学内で最も大きな広場が見渡せた。

千尋は目を疑った。

そこにあったのはエレクトリアルパレード。黄金色に煌めく豪華な馬車が円を描くように広場を回り、風船や紙吹雪が踊るように舞っている。その回りには更に、大学生による人垣が出来ている。

「まさか、あの千葉夢の国のミ○ツキーマウスさんでもいらしたのか!？」

否、大阪の推理は間違っていた。きらびやかな円の中央にぽつねんと佇む生き物に、大きい耳や尻尾はついてなかった。

そこにいるのはまがおうことなき、美少女であった。

美少女と運命の出会い！？

まさに美少女。パレードの中心にいるのは美少女であった。

キューティクルたっぷり光を反射し緩やかなウェーブを型どる茶色のツインテール、黒と赤を基調にしたチェックのエプロンドレス、ちんまりとした背。

透き通る肌に唇は……なんてチープな外見表現は却下する。そういったものはBOOK・OFF店頭お勧め文庫に任せる。

とにかくにも、そこには美少女がいた。

「せせせせんぱいッ、美少女ですよ、ビッショージョ！ テンプレ的ビッショージョ！」

あまりの現実にしばし唾然としていた千尋であるが、すぐさま大阪を見上げた。

が、見上げた先に大阪はいなかった。何故なら縮こまっていたからである。

「ガタガタガタガタ……」

「え？」

千尋の足元にはあからさまに青ざめ、あからさまに歯を鳴らし、あからさまに震える大阪がいた。

あっこには美少女、こっこには調子の悪い洗濯機のような大男。

千尋は両者を交互に見てから、眉を八の字に下げる。

「先輩、何してるんですか？ ここはお前のライバルだーッて私を拉致るトコロでしょう。」

まさか一昔前のラブコメディのサブキャラみたいに」

「「婚約者だ……」」

「なんて言いませんよ……ぬえッ 鶴！」

千尋は固まった。そして、

「こここんやくしゃ！？　このご時世に！！！？？」

「や、嘘」

大阪はしたり顔で言い放つとと、すつくと立ち上がった。千尋は取り合えず壁にめり込むと抗議の声をあげる。

「なんで嘘つくんですかッ」

「馬鹿やろう……、男は嘘で女を愛でる生き物だ……」

「調子のるなよ」

それはそうと、と、大阪は腕を組んだ。

「絶妙なタイミングだな。ありゃあ正に美少女だし萌えだろ」

「萌え設定が十年くらい古い気がしますが」

「お前がいうなよー」

和やかな空気。

二人は朗らかに視線を交わし微笑みあうと、

「あれライバルだから」

「絶対ヤダ」

バチバチと火花を放つ。

「なに言ってるんですかライバルとか！　馬鹿ではないですか！？　むしろ馬鹿ではないですか！！」

「馬鹿馬鹿いうな、グッドタイミングじゃないか。今に見てろ、あの子すぐライバルになっちゃうから」

「その自信はどこから来るんですか！」

千尋は焦燥した。こいつを早くなんとかしなければとデスノート

キラばりに思い、突っ込むべきポイントや方向性を見定める。一方、大阪は上機嫌に鼻唄混じりで今後の展開を予想していた。

「ライバルになるにはそうだなあ相場として予測するならば恋敵って立場が一番近いだろうなあやっぱりあれだないちご100%的な展開だな車が突っ込んでくると同時に俺が助けに入って彼女が惚れてしまうような感じなんだろうなあ実にそうに違いない……つまりッ」
ざっと流し終わると、大阪は千尋の肩を掴んだ。

「拉致る！」

「やっぱりいいいいい……!!」

持ち上げられたと思いきや既に担がれ、五回転ジャンプで黙らされ、扉を蹴破られ飄々と走られる。

廊下を渡り階段を降り脱兎のごとくアッ！ という間に千尋はパレードの中心にいた。

「よっこらセックスオンザシテイ」

「ぐえ」

パッと手を離され、地面にカエルよろしく落下する千尋。

「あたたたた……」

腰をスリスリ立ち上がると、周囲の視線が一気に集中していた。思わず、たじろぐ。

「あれ大阪じゃん……」

「うわあ……大阪きたよ……」

人垣がヒソヒソとざわめく。

「俺、有名になったなー」

ちよっと嬉しそうに頬を赤らめる大阪に、頭が痛くなる。

このヒト文芸部の外ではどんなことをやらかしているんだろう……、想像して背筋が凍った。つつい女王様が浮かんでしまったのだ。

（大丈夫、女王様は入院中。女王様は入院中）

「さあて……」

大阪は息を吸い込むと、

「おい美少女！ やーい美少女！」

やいのやいのと声をかけ始めた。

呆れ返り千尋は突っ込みを放棄する。大阪のしたいようにさせれば良い、あっちは民衆を惹き付ける絶世の美少女、どうせ相手にもされないのだから。

と思いきや、美少女はキラキラと銀粉を飛び散らせながら大阪へと振り向いた。そしてあろうことか、目を潤ませた。

「え」

これには千尋も驚く。大阪に至っては感無量の笑みだ。

「千尋みろよー美少女が俺を見てるよー」

美少女がゆっくりと、しなしなとパレードの壇上から降りてくる。

「あれかなあ、毎晩やってるシリシリタタキーヌダンスのお陰かな。ボブのお陰かなー」

アヘアへする大阪。

口をあめぐりとする千尋。

突き刺さる周囲の疑惑の瞳。

「関係図はなんだろうー。あれかな、幼馴染みかな。それとも入院していた時に同室だったあの子？ それともそれとも生き別れの義妹！？」

キモいこと限らない大阪の眩きに関わらず美少女が近づいてくる。

目には真珠の涙。一步また一步と歩み寄る。

そしてついに、美少女が一筋の涙を流し、手を広げて飛び込んできた。

「うおおおおおー!!!」

大手を広げ胸を晒す大阪、のすぐ脇を通り抜けると美少女は千尋の胸に飛び込んだ。

「え、こっち!？」

ざわめくオーディエンス。目を閉じ己を抱き締め気持ち良さそうな大阪。そして美少女。

千尋は狼狽した。

「いやいやいやいや、美少女! ちょっと間違ってますよ美少女!」
激しく冷や汗を流す千尋に、美少女は顔をあげた。

「いいえ、間違いではありません。千尋様」

凜とした断言。声まで可憐である。千尋はますます混乱した。こんな美少女と接点を結ぶような人生を千尋は歩んでいない。

千尋の人生は平凡だった。

1989年、平成と共に千葉県佐倉市で産声をあげた千尋は、健康優良児としてすくすく育った。

当然のことながら入院先で運命の出会いを果たすことはない。

千尋の人生は凡庸だった。

父マサトシの仕事は地元中小企業のサラリーマン、母ジュンコの仕事はこれまた地元中小企業のオフィスレディ。

当然のことながら引越もしない千尋は、地元の保育所小学校、中学校高校と進み、運命の出会いが起こるわけがない。恋空のように不良男子と付き合ってすらない。恋空は所詮フィクションだと

千尋は語っている。むしろ男と付き合ったことがない。

美少女と出会う接点などあるべくもない。

「平凡で凡庸な千尋の人生は、だが大学に入ってから変わった。生まれ育った千葉県を離れ、東京から更に少し離れたところにあるFランク大学に入り、変わった。陰気な文芸部に入り、イケメンな先輩とエロゲプロットを作ることになり変わったのだ。

ついには美少女との運命の出会いを果たした千尋。波瀾万丈な彼女の人生劇が、いま幕を開く――」

「ちよっ、勝手にヒトの人生語らないで下さい！ しかもなんでそんなに詳しいんですか！」

「俺、お前のウィキペディアだから」

「本当に気持ち悪いな！」

大阪の訳のわからないナレーションに一通り突っ込みを入れると、千尋は深呼吸をした。

「あのッ」

「はい」

眼前に迫る美少女の笑み。あまりの睫毛の長さにクラクラする、と同時にやはりこんな睫毛の長い女と出会った記憶などないと思に至る。

「……悪いけど人違いじゃないかな。なんていうか、千尋違いというか。私、あなたのような美少女と会ったことないです、はい」

「びしょうじょ……？」

美少女はきょとんとすると、すぐさまホンワリと微笑んだ。ぷるんとした唇でささやく。

「千尋様はきつとご存じですよ。“僕”のこと」

「……………僕？」

不意に走った違和感に、千尋は目を丸めた。そして改めて美少女を凝視する。

美少女は美少女であるが、改めて見ると……なんかデジャヴ。

「会ったことある……かも？」

千尋が恐る恐る答えると、キラッと美少女は笑った。

「依龍一です、りゅ・う・い・ち」

美少女はにこやかに千尋の手を握ると、己の胸に沈めたのだった。

千尋と龍一の運命的ではない出会い

やんごとなきフリルが「これでもかッ」というほど飾られた白いドレスの胸元へと千尋の手のひらが導かれてゆく。そして、やんわりと触れ、ゆっくりとゆっくりと沈み、沈み沈み沈み……。

「あれ？」

千尋はこわばった表情のまま疑念に首を傾げた。膨らみが無い、というか、若干硬い。

「Aカップ？ いやむしろAAカップ？ というかトリプル……」

思わず揉んでみる、も、いくら試みても確実に硬く、違う意味で跳ね返ってくる感触がある。

美少女が潤んだ瞳で、

「すこし、くすぐったいです」

「あ、ああ、ごめんなさい……」

千尋は電光石火の早さで手を離すと、

揉んでみても

揉んでみても

我が感触はば得られず

じっと手を見る

取り合えず一句読んでから脂汗を書き始めた。目まぐるしくシナプスを回転させる。

たわらりゆういち、

タワラリュウイチ、

俵龍一……………。

そしてハッと息を飲んだ。

「もしかして、りゅっ、龍ちゃん!？」

——大阪が。

「人の台詞取らないで下さいよ！」

「だって遅いからさ」

「いや合ってたよ！今のテンポは合ってたよ、無論のこと正しいよ!？」

「お前にテンポの何が分かるッ。お前はテンポさんの何を知ってるって言うんだ——ッ！」

「テンポさんって誰だぁぁぁぁぁ」

「けっ、喧嘩はやめて下さい……」

可憐な声色が千尋の耳をくすぐる。仕方なく大阪に掴みかからんとする腕を止めると、呟いた。

「龍ちゃん……」

千尋は思い出していた。遠い昔、小学校に通っていた頃。そこには千尋がいて、龍ちゃんがいた。千葉県の子供に、確かに二人はいたのだ。

千尋の心がセピア色に輝く過去へと舞い戻る。あの日、千尋は子供で、龍ちゃんも子供で、二人は仲良し——、そうでもなかったんじゃないっけ？

いやいや、とにかく思いだそう。

春風流れる皐月。三年生に上がったばかりの千尋を朝日が照らしていた。黄色いキャップに、赤いランドセル。膝下のスカート。

どこからどう見ても小学生女子の千尋は学校へとひた走っていた。

ぜえはあと呼吸を乱しながら全力疾走する。ついでに鬼の形相。ありとあらゆる角度からみて如何にも訳あり（つまり遅刻確定）の様子であった。

無理もない、遅刻をすると昼休みに罰として漢字練習をさせられるのだ。ひとつの漢字をノート一頁にぎっちり書き込む。しかも遅刻をするごとに書く頁数が増えるので、今回遅刻したら十三頁も書かねばならない。

千尋は焦っていた。猛然と大地を蹴り、アスファルトを駆け抜ける。

と、突然、真横でブレーキ音が響いた。

何事かと首を向けると、そこには白銀の車が停まっていた。映画でしか見たことの無いような、クラシックに洗練されたデザインのそれはロールスロイスファントムという、千尋の生涯年収レベルの車であったが小学生女子に分かることなく、なんか変な車が小脇に停まったんですけどと千尋は固まった。

その直後、彼女の頭を走馬灯のように駆けたのは、春風が吹くと現れる田舎の風物詩・変態さんの話である。

担任のハゲチャビン先生（いつも先生としか呼んでないので正式名称不明）が朝の会で子どもたちに変な人にはくれぐれ気を付けるように伝えていたのは先週のことだ。

子どもたちの間で話題騒然の変態さんは噂によると、子どもたちに近づいては、

「チョットお、ボクのみてくださいよう」

と呟き大人なオティンティンを露出する、所謂自己完結型の変態さんで、故に子どもたちには“出会ったら武勇伝になるような金のエンゼルの存在”であった。

故に固まると同時、千尋の小さな胸は期待で膨らんだ。

やがて車の窓が滑るように開き、中からピヨコンと現れたのは――

しかしながら変態さんではなく、小学生。

「遅刻しそうで急いでるの？ よかったら送るよ」

くりつと潤んだ瞳。人形よろしく整った顔。

大体同じ年くらいだろうか、見知らぬ子に声をかけられ、千尋はたじろいだ。ゆっくりと後じさる。

「どうしたの？」

「や……知らないヒトの車には乗るなって」

千尋が答えると、小学生はニコリと笑った。

「ぼく、たわらりゆういち。今日から佐倉森端小学校の三年生なんだ。宜しくね！」

「え……」

間違いなく同じ年らしい小学生は車のドアを開いた。白いシャツに漆黒の短パン、靴下にカブトムシ並みに黒光りする革靴。

まるで貴族のようにキツチリとした小学生は颯爽と車から飛び出すと、千尋を導くように片手を開いた。

「さあ乗りなよ。遠慮しなくて良いよ。ぼくたちもう学校も年も、名前だって知ってるんだから」

ある春の早朝、偶然にも千尋は、こうして超絶金持ち美“少年”俵龍一と出会ったのである。

「なあなあ、それ運命の出会いなんじゃないのか？」

大阪は千尋の記憶に割り込んだ。小学生千尋はブンブンと首を振ると、

「だって仲良くなれなかったんだもん」

……次回へ続く！

何故なら彼もまた特別な存在だからです

人間とは二種類に分類される。天に何も与えられない人間と、天に二物どころか十物百物と途方もない愛情を与えられた人間である。そして後者は希少動物に当たる。

千尋の前に突如として流星のごとく現れた俵龍一は、その希少動物の一人であった。

まんまとロールスロイスファントムという超高級車に招かれてしまい、希少動物の横に座らされた千尋は不思議な感覚に陥っていた。それは、千尋が生まれてこのかた感じたことのない不思議な浮遊感だった。

動悸、息切れ、尿意、冷や汗が出てとまらないという諸々の症状を伴った浮遊感。まさに未知の感覚である。それが、千尋の全身に絡み付き、心臓までギリギリと締め上げている。

加えて、なんか知らないけど一秒が長くない!?

この感覚は何なのか。幼い千尋は戸惑いながら、自問しながら、車が学校に着くのを待った。

今ならわかる。大人になった今ならば。

「死にたい」

悲しいかな、どちらかというところ人間の天に何も与えられていない人間の、その中でも更に何も与えられなかったというか荷物を与えられた感が否めない出生の千尋は、俵龍一の出現で軽い鬱にかかっていたのだ。

そしてそれは一種の防衛。心の殻に自らを投じることで「なんかこの子暗いし話しかけにくいやんか」というATフィールドを千尋は張っているのである。

ああ、弱肉強食といってしまうえば楽な世よ。

学校に着いてからも、俵龍一のオーラは凄まじかった。あまりのオーラに男子はどよめき女子は色めき立った。

そんな俵龍一を嫉妬の目線で見つめ、陥れようとする影が近寄る――隙すら与えられなかった。

そりゃあ、まあ、スネオチック・ジャイアリズムな少年たちは存在した。だって俵龍一は好きな娘の心を奪ったり、先生のえこひいき対象であるからに、まあ初日にそんな雰囲気は出たわけである。

しかしながら、千尋はこのとき『影には光ができるというが、光が強烈すぎてすべてを包むとき、影すらも消えてなくなるのだ』と学んだ。

俵龍一は嫉妬や劣等感さえ奪い取る強烈な光だった。

「みんな仲良くしようよ！」の一言とそれに伴う言動で、彼は寧ろ日陰の者に光を与えたのだ。

「何したの何したのー」

好奇心旺盛の瞳で大阪が千尋の回想に首を突っ込む。千尋は無表情で答えた。

「フオークダンス」

千尋はあの日を忘れないだろう。

たった一人の少年の鶴の一声で、教室の机と椅子が脇に寄せられ、さほど仲がよくなり、寧ろ『男子はバカで汚い』だの『女子は生意気でウルサイ』だの陰でののしりあっていた男女が手を取り合っ

のマイムマイムである。

どちらかというと先天性インドア気質の千尋は風邪気味という嘘で自己防衛し、隅の方でその光景を見やったが、強烈以外の何でもなかった。

まさか、体育祭でも体育の時間でもない全くの一般的休み時間に、クラスが輪を作りフォークダンス。その中心で超絶金持ち美少年がオーラを放つ。

千尋はその夜、まぶたを閉じててもその光景が見えたという。

あまりの回想に、さすがの大阪君もドン引きでした。

「ナニそれ、宗教？」

「素直な感想ありがとう」

千尋は頷くと、遠くで燦々と光り輝くパレードをチラリと横見した。

『ごめん作戦会議！ 作戦会議するから！』と訳のわからない言い訳を使い、無理矢理に俵龍一と距離をとったものの、俵龍一は千尋から興味を失わずに絶えず千尋を伺っている。信者を増やしながら。

「まあ、そんな理由があって、仲良くなれなかったんです」

「でも、あの様子だとさ、お前アイツの特別な存在じゃん。キリストモドキ天草四郎似のヴェルタースオリジナルだろう！ なんてなんです？」

「それが……分からなくて。私、本当に隅っこでうずくまっていたというか」

うーんと頭を抱えてみる。

しかしやはりなんとも、思い出せない。何故なら、仲良くなれな

かったのだ。触らぬ美少年になんとやらで、千尋は優しさに包まれる前に距離を置いた。クラスでは群を抜いて接点がない自信がある。

「確かめるしかないな。あいつの回想で」
「え？」

大阪から有り得ない言葉が出たように思えて、千尋は固まった。

「大阪先輩、今なんと？」

「この状況を打破するにはこれしかないだろう！」

大阪は瞬時に四股を踏んだ。

「どすこいッ!!!」

「ぎゃあああああああッ！？！？！？！？！？」

千尋は大阪に悠々と担がれると、俵龍一の回想の中へと拉致された。

続く！

進まない、展開

「って、他人の回想に入れるかあああああゝ!!」

美少女・俵龍一の眼前で大阪に遺棄され、千尋は絶叫した。遙か遠く、遠く、大阪はというと家政婦は見たヨロシク、離れた場所はこちらをうかがっている。ウインクをしながら。

脱力しながら、千尋は泣く泣く俵龍一と対峙した。

「ご無沙汰、してます……龍ちゃんこと俵龍一君」

俵は、千尋の何気無い、というか窮地の中で絞り出した挨拶に感激している。

「はい。やっとお会いすることが出来ましたっ」

「待て！」

抱きつこうと両手を広げた俵に犬を止める要領で千尋は叫んだ。

俵はその命令に素直に従う。

千尋は、ふうと一呼吸ついてから、

「私、実はなんで急に来られたのか分からないですが」

「千尋様にお会いするためです！」

「えと、それじゃよく分からないというか。それに美少女になられて、経過もよく分からないというか……」

見れば見るほど、俵は愛くるしい生き物であった。目は大きく、睫毛は単体で飛び立てそうなくらい長く艶やかなカールを描き、頬は天使のような柔らかな赤みをおび、唇はサクランボ、なわけ。何を食べるんだろう、少なくとも排泄はしなさそうだと千尋は魂を奪われそうになり、おっととそれを引き留めた。

「俵龍一くん！」

「はいっ」

「説明頼もう」

「はいっ、千尋様がお望みなら！」

俵は立ち上がると、パチンと指をならした。するとパレードがモ
ーゼのごとく二つに割れ、畳二畳はある巨大な液晶テレビが現れた。
「ビエラだとッ!？」

咄然とする千尋の代わりに大阪が呻くと、

「こんなこともあるのかと用意したのです。万全に万全をきしイレ
ギュラーを滅するのが我が家訓ですから」

更に俵は指をならす。

今度は随分と高そうなアンティークちっくな西洋の円卓と椅子が
用意された。立て続けに、円卓の上に用意される無数のケーキと紅
茶の入ったティーカップ。

「どうぞお座り下さいませ」

俵にエスコートされ、千尋と大阪は椅子に腰をかけた。二人が落
ち着くのを見やると俵は、一呼吸置いてから、

「レディースエンドジェントルメン！これから私俵龍一が誘うビ
ューティフルライフストーリー！是非ともご堪能下さいまし!!」

掛け声と同時に、ビエラから光が放たれる。美しい桜吹雪をバツ
クに流れるように現れる明朝体。

『千尋一期一笑ゝあなたと出会えたこと、それが人生のすべてとな
りました。サナギだった私は蝶へと生まれ変わりあなたのもとに羽
ばたいてゆきます』

「VTRだっ……!？」

気絶しそうな千尋の代わりに呻く大阪。

「……これが千尋様との思ひ出です」

今、過去の扉が開かれた。

作者のためのあらすじ

◆あらすじ

大阪の依頼でSMゲームを作るはめになった千尋。

取材先で車に轢かれて平気だけど病院に行くこととなった女王様と
「取材は出来なかったけど、ちゃんとつくって、一番にゲームやらせてね。私を満足させるのよ」

という約束をしてしまう。

女王様は入院し、責任と恐怖におびえてスランプになる千尋。

それをみて、ライバルをつくることを提案する大阪。

偶然に美少女ライバル出現か!?

男の娘ですけどね。

◆千尋

二十歳の大学生。文芸部。コロボックルといわれるほど身長が小さい。

茶髪のショートカット。いつも敬語な突っ込み役。

「……そんな設定じゃあ、勇者が勇者の意味さえ、ないじゃないですかあ」

◆大阪

物事に頭をつっこみ無茶苦茶にするのが好きな変態。大学生。

AVと同人ゲームを合体させて大儲けをたくらむ自宅。

体が大きく、豪快な性格。

黒髪、短髪。

「俺がつくるのは、女王様と永遠と絆の君と響きあい生まれ変わリ伝説を呼び覚まし魂を呼び起こし生きる意味を知るRPGです」

◆ランデブー女王様

度肝を抜かれるほどの美人。人の心を読むサディスト。体が丈夫で、車に轢かれてもまず死なない。

自分のオーラを電球のようにあやつることが出来る。

「あら大阪クンじゃないの。大学生のくせに子供がいたのね」

◆シロウサ宅急便、の車

女王様を轢いた。

マッチョな白い兎がダンボールを片手で運んでいるシロウサマークが背中についた真っ白い作業服を着ていた配達員を乗せている。

「どうしたもこうしたもないです、轢かれましたよ！ 僕が轢きました！」

◆依龍一

キューティクルたっぷり光を反射し緩やかなウェーブを型どる茶色のツインテール、黒と赤を基調にしたチェックのエプロンドレス、ちんまりとした背。

僕っこ美少女だけど、男の娘。金持ち。千尋のために美少女になったらしい。

龍ちゃんと呼ばれる。

◆勇者

長く艶やかな黒髪と鞭と低溫蠟燭とピンヒールが武器で、深紅のボディコンスーツを着ているに違いないミストレス。別名女王様。

日常生活において調教を行うのが好きで、魔王も調教したいと考えている。

◆まとめ

これから描かれるのは龍一が女の子になって千尋に接近した理由のある過去です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1414c/>

SMクエスト

2010年10月11日01時54分発行